

中国古典文学大系 26

平凡社

三国志演義 上

羅貫中作 立間祥介訳

訳者紹介

たつましようすけ

立間祥介 昭和3年東京都生。善隣外事専門学校卒。

専攻 中国文学。現職 都立大学講師。主訳書「従文

自伝」(河出書房)「野火と春風は古城に闘う」(平凡

社)「呼蘭河の物語」(平凡社)「中国講談選」(平凡社)

現住所 東京都国立市西2丁目14-39

中国古典文学大系 全60巻

三国志演義 (上)

第26巻

昭和43年1月6日 初版第1刷発行

昭和47年11月20日 初版第2刷発行

定価 1700 円

訳者との申
合せにより
検印を省略
いたします

訳者 立間祥介

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下中邦彦

発行所

郵便番号 102
東京都千代田区
四番町4番地
振替・東京29639

株式
会社

平凡社

落丁・乱丁本はお取替いたします

© 株式会社 平凡社 1968

印刷 東洋印刷株式会社

製本 株式会社 石津製本所

0397-312261-7600

三国志演義(上) 主要人名表

(排列は筆画順。ただし同姓の君臣・父子等の場合は例外とする)
* 関羽・張飛の生年については正史に記載なく、『演義』によった。

孔融（一五—二〇）字は文舉。孔子二十世の孫。文名高く建安七子の

一に数えられる。

王允（一〇—一六）字は子師。憂国の文官。董卓暗殺の立役者。

公孫瓚（？—一〇）字は伯珪。河北の豪族で劉備の学友。

甘寧（？）字は興霸。孫権の部将。

呂布（？—一六）字は奉先。後漢末随一の武勇をうたわれながら、

転変常なき性格のため天下の嫌われ者となる。

何進（？—一八）字は遂高。靈帝の外戚で無能な成上り者。

李傕（？）董卓の部将。董卓の没後、郭汜とともに長安に乱入し、

一時天下をとる。

周倉（？—二〇）黄巾の残党で、関羽を慕ってその部将となる豪傑。

正史には見えない。

周泰（？）字は幼平。孫策・孫権の部将。

周瑾（一七—二〇）字は公瑾。孫策の義弟。孫権を助け、呉の大都督

として赤壁の合戦で威名を馳せる智将。

孫堅（一五—一八）字は文台。孫子の末孫。弱年より勇名をうたわれ、

董卓討伐戦で洛陽一番乗りの偉功を立てる。

孫策（一七—二〇）字は伯符。孫堅の長子。堅の没後、幕下に人材を

集めて江東の基礎をきずく。

孫權（二二—二五）字は仲謀。孫堅の次子。父兄の業を継ぎ呉を建て

た名君。呉の大帝。

馬騰（？）字は寿成。漢の伏波將軍馬援の末孫。巨軀強力の隴西の

豪族。

馬超（二六—三三）字は孟起。馬騰の長子。劉備父子に仕えた蜀の五

虎将の一。

徐庶（？）字は元直。一名單福。諸葛亮の学友。はじめ劉備の軍師、

のち曹操に仕える。

夏侯惇（？—三三）字は元讓。曹操拳兵以来の部将。曹丕即位のとき

大將軍となる。

夏侯淵（？—三〇）字は妙才。夏侯惇の従弟。惇とともに曹操の拳兵

に参加、以来数々の戦功を立てる。

荀彧（二〇—三三）字は文若。曹操の幕僚。

袁紹（？—二〇）字は本初。漢の名門の出で河北に強大な勢力を張

る。性は優柔不断、ために官渡で曹操に大敗を喫する。

袁譚（？—二〇）字は顯思。袁紹の長子。

袁熙（？—二〇）字は顯奕。袁紹の次子。

袁尚（？—二〇）字は顯甫。袁紹の末子。

袁術（？—一八）字は公路。袁紹の従弟。淮南（九江）で成を建て、

一時帝位を僭称する。

張角（？—一八）読書人出身の黄巾の乱の首謀者。大賢良師・天公

將軍と自称。

張松（？—三三）字は永年。劉璋の幕僚。劉備に益州の地図を献

じ入蜀の手引きをする。

張郃（？—三三）字は儵父。袁紹の部将。のち曹操に仕える。

張昭（二六—三三）字は子布。孫策・孫権の幕僚。孫策の信任を受け、

呉の重鎮となる。儒学の造詣深く、『春秋左氏伝解』『論語注』を

著わす。

張飛（二六—三三）字は翼德。劉備・関羽に兄事する。直情径行、武

勇拔群の勇将で、長坂橋では一喝、曹操の大軍を退ける。蜀の五虎

将の一。

張遼（二九—三三）字は文遠。はじめ呂布に仕え、のち曹操の部将と

なる。情義に厚く、関羽と肝胆相照らす仲となる。

張魯（？）字は公祺。五斗米道の教祖として三十年にわたり漢中に君臨、のち曹操に降る。

君臨、のち曹操に降る。

陳宮（？—一六）字は公台。曹操打倒を企図とする呂布の幕僚。

陳琳（？）字は孔璋。建安の七子の一。文才をもってはじめ袁紹に仕え、のち曹操に仕える。

曹操（一五—一三〇）字は孟德。幼名阿瞞。「乱世の奸雄、治世の能臣」といわれ、権謀術数にたけた文武両全の英雄。幕下に多くの人材を集め、天機をつかんで中原を統一、魏王となる。魏の武帝。

曹丕（一八—二三）字は子桓。曹操の長子。文武両道にたけ、のち献帝を廢して魏を建てる。魏の文帝。

曹仁（一六—一三三）字は子孝。曹操の従弟。曹操に従って転戦、曹丕即位後、大司馬となる。

許褚（？）字は仲康。曹操の武將。親衛隊長として常に身邊に侍す。汜（？）幼名阿多。董卓の部將。李傕とともに、一時天下をとる。

郭汜（一七一—二三）字は奉孝。曹操の片腕といわれた幕僚。

郭嘉（一三—一〇四）字は恭祖。徐州の牧。劉備に徐州を譲る。

程昱（一五—一三三）字は仲德。曹操の幕僚。

程普（？）字は德謀。孫堅父子三代に仕えた文武両全の部將。

程忠（一四—一三三）字は漢升。弓の名手。劉備父子に仕えた蜀の五虎將の一。

黃蓋（？）字は公覆。孫堅父子三代に仕えた部將。赤壁の合戦に際し苦肉の計を献じる。

貂蟬（？）王允の館の妓女。王允の意をうけて董卓の侍妾となり、呂布を董卓暗殺にはしらす美女。正史には見えない。

董卓（一〇—一三）字は仲穎。残忍好色な隴西の豪族。強大な武力を背景に献帝を擁立し、専横をきわめる。

賈詡（？）字は文和。はじめ董卓に仕え、のち曹操に仕える智將。

趙雲（？—一三〇）字は子竜。劉備に仕え当陽の長坂坡で単騎百万の敵中を突破、幼主劉禪を救出した英雄。

劉協（一八—一三三）後漢第九代の皇帝。献帝。曹丕に廢され山陽公となる。

劉表（？—一三〇）字は景升。荊州の牧。

劉琦（？—一三〇）劉表の長子。温厚篤実の人であったが継母蔡氏にうとまれ、江夏へはしって劉備の庇護下にはいる。

劉璋（？）字は季玉。益州の牧。暗愚のため、手を拱いて劉備に益州を奪われる。

劉備（一六—二三）字は玄徳。漢の中山の靖王の末孫。黄巾の乱にさ

いして関羽・張飛とともに率兵。軍師諸葛亮の助けを得て蜀の主となる。蜀の昭烈帝。

劉禪（二三—二三）字は公嗣。幼名阿斗。劉備の子。宦官を寵愛して亡国を招く暗君。蜀の後主。

魯肅（一三—一三七）字は子敬。孫權の幕僚。蜀との提携に腐心する。周瑜の没後、呉の大都督となる。

諸葛亮（一八—二三）字は孔明。別名臥竜。襄陽郊外の隆中に隱棲中で天下三分の計をたて、劉備の三顧の礼にこたえて出廬、非力の

劉備を助けて蜀をたてた不世出の奇才。

諸葛瑾（一三—一三）字は子瑜。諸葛亮の兄。孫權の幕僚。

魏延（？—一三）字は文長。劉表の部將。のち劉備に仕える。

関羽（一三—一三）字は雲長。劉備に兄事する文武両全の名將。信義に厚く、大難刀をとっては天下無敵。蜀の五虎將の一。

龐統（一三—一三）字は士元。別名鳳雛。劉備の軍師。諸葛亮と並び称される知恵者。

目次

第一回

桃園に宴して 三豪傑義を結び
黄巾を斬って 英雄始めて功を立つ

第二回

張翼徳 怒って督郵を鞭うち
何国舅 謀って宦官を誅す

第三回

温明殿に議して董卓 丁原を叱し
金珠を贈って李肅 呂布を説く

第四回

漢帝を廃して 陳留位に即き
董卓を謀らんとして 孟徳刀を献ず

第五回

矯の詔発せられて 諸鎮曹公に応じ
関兵を破って 三英雄呂布と戦う

第六回

金闕を焚いて 董卓兇を行ない
玉璽を匿して 孫堅約に背く

第七回

袁紹 盤河に公孫と戦い
孫堅 江を越えて劉表を撃つ

第八回

王司徒 巧みに連環の計を使い
董卓 大いに鳳儀亭を鬧がす

第九回

暴兇を除いて呂布 司徒を助け
長安を犯して李傕 賈詡に聴く

第十回

王室に勤めんとして馬騰 義兵を挙げ
父の讐を報ぜんとして曹操 師を興す

第十一回

劉皇叔 北海に孔融を救い
呂温侯 濮陽に曹操を破る

第十二回

陶恭祖 三たび徐州を譲り
曹孟徳 大いに呂布と戦う

第十三回 二七

李傕・郭汜 大いに兵を交え
楊奉・董承 双して聖駕を救う

第十四回 二七

曹孟徳 駕を移して許都に幸し
呂奉先 夜に乗じて徐州を襲う

第十五回 二六

太史慈 酣に小霸王と闘い
孫伯符 大いに敵白虎と戦う

第十六回 二四〇

呂奉先 戟を幟門に射
曹孟徳 師を清水に敗る

第十七回 二五

袁公路 大いに七軍を起こし
曹孟徳 三将を会合せしむ

第十八回 二五

賈文和 敵を料つて勝を決し
夏侯惇 矢を抜いて睛を啖う

第十九回 二五

下邳城に 曹操兵を塵にし
白門楼に 呂布命を殞す

第二十回 二七

曹阿瞞 許田に打囲し
董国舅 内閣に詔を受く

第二十一回 二五

曹操 酒を煮て英雄を論じ
関公 城を賺きとつて車胄を斬る

第二十二回 二九

袁・曹 おのおの馬歩三軍を起こし
関・張 共に王・劉二将を擒とす

第二十三回 三〇

禰正平 衣を裸いで賊を罵り
吉太医 毒を下つて刑に遇う

第二十四回 三三

国賊 兇を行なつて貴妃を殺し
皇叔 敗走して袁紹に投ず

第二十五回 三八

土山に屯して 関公三事を約し
白馬を救つて 曹操重困を解く

第二十六回 三八

袁本初 兵に敗れ将を折れ
関雲長 印を掛け金を封ず

第二十七回

美髯侯 千里を単騎で走り
漢寿侯 五関に六将を斬る

第三十四回

蔡夫人 屏を隔てて密語を聴き
劉皇叔 馬を躍らせて檀溪を過ゆ

第二十八回

蔡陽を斬って 兄弟疑を釈き
古城に会して 主臣義に聚る

第三十五回

玄德 南漳で隠淪と逢い
半福 新野で英主と遇う

第二十九回

小霸王 怒って于吉を斬り
碧眼児 坐して江東を領す

第三十六回

玄德 計を用いて樊城を襲い
元直 馬を走らせて諸葛を薦む

第三十回

官渡に戦って 本初敗績し
烏巢を劫って 孟徳糧を焼く

第三十七回

司馬徽 再び名士を薦め
劉玄德 三たび草廬を顧う

第三十一回

曹操 倉亭に本初を破り
玄德 荊州に劉表を依る

第三十八回

三分を定めて 隆中に策を決し
長江に戦って 孫氏讎を報ず

第三十二回

冀州を奪って 袁尚 鋒を争い
漳河を決して 許攸 計を献ず

第三十九回

荊州城に公子 三たび計を求め
博望坡に軍師 初めて兵を用う

第三十三回

曹丕 乱に乗じて甄氏を納め
郭嘉 計を遺して遼東を定む

第四十回

蔡夫人 議って荊州を献じ
諸葛亮 火もて新野を焼く

第四十一回 三〇

劉玄德 民を攜えて江を渡り
趙子竜 単騎 主を救う

第四十二回 三〇

張翼徳 大いに長坂橋を鬧がし
劉豫州 敗れて漢津口へ走る

第四十三回 三七

諸葛亮 群儒と舌戦し
魯子敬 力めて衆議を排す

第四十四回 三七

孔明 智を用いて周瑜を激し
孫権 計を決して曹操を破る

第四十五回 三六

三江口 曹操 兵を折たれ
群英会 蔣幹 計に中る

第四十六回 四〇

奇謀を用いて 孔明 箭を借り
密計を献じて 黄蓋 刑を受く

第四十七回 四四

關沢 密かに詐りの降書を献じ
龐統 巧みに連環の計を授く

第四十八回 四三

長江に宴して 曹操 詩を賦し
戦船を鎖いで 北軍 武を用う

第四十九回 四六

七星壇に 諸葛 風を祭り
三江口 周瑜 火を縱つ

第五十回 四七

諸葛亮 智をもって華容に算り
関雲長 義によって曹操を釈つ

第五十一回 四四

曹仁 大いに東呉の兵と戦い
孔明 ひとたび周公瑾を氣らしむ

第五十二回 四五

諸葛亮 智をもって魯粛を辭け
趙子竜 計をもって桂陽を取る

第五十三回 四六

関雲長 義によりて黄漢升を釈し
孫仲謀 大いに張文遠と戦う

第五十四回 四九

呉国太 仏寺に新郎を看
劉皇叔 洞房に佳偶を續ぐ

第五十五回

玄德 智もて孫夫人を激せしめ
孔明 二たび周公瑾を気らしむ

四八

第五十六回

曹操 大いに銅雀台に宴し
孔明 三たび周公瑾を気らしむ

四八五

第五十七回

柴桑口に 臥竜 喪を弔い
未陽泉に 鳳雛 事を理む

四九三

第五十八回

馬孟起 兵を興して恨みを雪がんとし
曹阿瞞 髪を割ち袍を棄つ

五〇三

第五十九回

許褚 衣を裸いで馬超と闘い
曹操 書を抹して韓遂を問つ

五一二

第六十回

張永年 反つて楊修を難じ
龐士元 議つて西蜀を取らんとす

五二〇

主要人名表

前付 一

略年表

五三三

解 地

説 図

三九 三七

三
国
志
演
義
上

立 羅
間* 貫
祥 しょう
介 すけ 中 ちゅう
訳 作

とうとうと東する水はてしなく
長江に消えし英雄かずしれず
是非成敗もうたかたに
青山のひとりのこりて
紅の夕日迎えるそもいくそたび

白髪しらげの漁翁りゆうわう仙人せんじんなぎさにたちて
秋の月春の風みて年へたり
一壺いちぶのにごり酒もて相逢ふそうえは
過ぎしいくたのことどもも
いまはむかしのかたりぐさ

第一回

桃園とうげんに宴うたげして 三豪傑さんごうけつ義を結び
黄巾きうしんを斬きつて 英雄いゆう始めて功を立つ

そもそも天下の大勢は、分かれること久しければ必ず合し、合すること久しければ必ず分かれるもの。周しゅうのすえ七国分かれ争い、秦しんに併

合されたが、秦亡ぶや楚・漢分かれ争い、また漢に併合された。漢朝は、高祖が白蛇を斬つて義兵を興し、天下を統一したのはじまり、のち光武帝の中興があつて、以来獻帝まで伝わり、ついに三國に分かれた。このたびの乱の源をたせば、およそ桓・靈二帝より始まったといえる。桓帝は正義の士を弾圧し、宦官を重用した。桓帝崩じ、靈帝即位するや、大將軍たいしゆん竇武・太傅たふ陳蕃ちんぱん兩名が相ともに補佐に当たった。おりしも宦官曹節そうせつらが権力を壟断りゆうだんしており、竇武・陳蕃がこの誅滅を謀ったが、事破れて却つて殺害され、これよりして宦官はいよいよ専横せんごうをきわめることとなった。

建寧二年けんねいにふた（二〇〇）四月十五日、帝溫徳殿おんとくでんにおでましあつて、正に玉座に着こうとされたとき、とつぜん殿中の一角に不気味な風が吹きおこるとみるまに、青色の大蛇が梁上より飛来して玉座に蟠わだかまった。帝があつと昏倒されるのを、左右の者急ぎ宮中に扶けいれまいらせ、百官どもはただあれよあれよと逃げまどうばかり。須臾しゆゐにして蛇の姿は消え失せ、たちまち凄じい雷雨となつて雹ひょうまでまじえ、夜半まで降りつづいたので、ために倒壊した家屋は数知れなかった。

建寧四年二月、洛陽に地震あり、この時も大津浪がおこつて、沿海の住民ごとごとく巨浪に捲かれ海に運び去られた。

光和元年かうわげん（二〇〇）、雌鷄めいけいが雄となつた。

六月一日、十余丈の黒色の妖氣が温徳殿中に飛びいった。

秋七月、玉堂殿より虹が立ち、五原の山々に激しい山崩れがあつた。かかる不吉な事件が一、二にとどまらなかつたので、帝が臣下たちに災害異変の原因をおたずねになったところ、議郎蔡邕さいいが憚る色もなく、虹の落ち鶏けいの變化せるは女子と宦官が政治に容喙ようゑいせるためとの上奏文を奉った。帝はこれをみそなわされ、嘆息されて更衣にお立ちになった。後刻、曹節そうせつひそかにこれを読み、巨細こさいにわたつて左右の

者に知らせたので、一同、事をかまえて蔡邕を罪におとし、官を召し上げて国許へ放逐した。その後、張讓・趙忠・封諤・段珪・曹節・侯覽・蹇碩・程璜・夏惲・郭勝ら宦官十名党を組んで奸悪を働き、「十常侍」と称え、帝は張讓を信じ敬って「父上」と呼ばれた。これより政道日々に紊れ、ために天下の人民ら乱を思い、盜賊各地に群がり起るにいたった。

時に、鉅鹿郡に張角・張宝・張梁なる三人の兄弟があった。張角は由来拳人たり得ずにいた秀才で、山に入り藥草を採って暮しをたてていたが、一日、山中で藜の杖をついた碧眼童顔の老人に出会った。老人は彼をとある洞穴に呼び入れ、天書三巻を授けて、

「これは太平要術と申すもの。汝これを得し上は、天に代わって普く教えをひろめよ。もし悪心きざすことあらば、天罰たちまち下るであらう」

彼ははたと平伏して名を尋ねると、

「わしは南華老仙である」

と言うなり、一陣の清風と化して消え去った。

張角はこの書を得てより日夜習得にはげみ、風を呼び雨を喚ぶことができるようになって「太平道人」と号した。中平元年（一八四）正月、疫病が流行したとき、張角は護符と水をひろく施して人々の病を癒やし、自ら「大賢良師」と称した。その弟子は五百有余人。全国各地を渡り歩いたが、いずれも呪文を書き呪術をよくした。のち帰依するもの日を追ってふえたので、張角は三十六の方を立て、一万余人をもつて、大方、六、七千人をもつて小方とし、それぞれ頭目を置いて將軍と名乗らせ、「蒼の世はすぎ黄の世だ。甲子の年は天下大吉だ」なる言葉を言いひろめ、人々に白土で『甲子』という二字を家の大門に書

きつけさせた。青・幽・冀・荆・揚・兗・豫八州の人民は、戸ごとに大賢良師張角の名札を祀って崇め尊んだ。

張角は一味の馬元義に金帛を持たせてひそかに宦官封諤のもとへ遣わし、誼みを結んで内応のことを頼むとともに、二人の弟を呼んで言うのに、

「民の心は得難きもの。いまや民心はわが方にあり、天下を取る好機と見た。これをみすみす取り逃がすことはあるまい」

かくてひそかに黄色の旗をつくって蜂起の期日を定め、同時に封諤にこの由を伝えるべく、弟子の唐周に書面を届けさせた。唐周は禁裡に直行して謀反の事を訴えに及んだ。帝は大將軍何進に命じて、軍を馬元義のもとに差し向け、これを打ち首にするとともに、封諤ら一味の者を取りおさえて獄に下したもうた。張角は事の露われたのを知ってにわかに兵を挙げ、自らは「天公將軍」と称し、張宝は「地公將軍」、張梁は「人公將軍」と称して、人々に触れた。

「いま漢の運尽きんとして、大聖人いず。汝ら皆よろしく天に従い正しきにつき、もつて太平を楽しめよ」

四方の人民、黄色の中で頭をくるみ張角の謀反に加わるもの四、五十万。賊の勢いおいにふるい、官軍は戦わずして四散した。何進は帝に奏上して、各地の防備を固め賊を討つて功を立てよとの詔をすみやかに下しおかれるようお願いし、また中郎將盧植・皇甫嵩・朱儁を三方面へ派遣し、精兵をひきいて討伐に向かわせた。

さて張角の一軍は進んで幽州の境を侵した。幽州の太守劉焉は、江夏郡竟陵県の人で漢の魯の恭王の末孫であったが、このとき賊軍迫ると聞いて、校尉鄒靖を呼んで諮ると、鄒靖の言うのに、

「賊軍は多くわが軍は手薄にござりますれば、火急に兵を募り、賊に

備えるが至当かと心得ます」

劉焉はこの意見をいれ、ただちに義兵募集の高札を出した。高札が涿県に立てられたとき、これに応じて涿県より一人の英雄が現われた。この人、学問をあまり好まず、性温和で口数すくなく、喜怒を色にあらわさない。生来大志を抱き、つとめて天下の豪傑と交わりを結んでいる。身の丈七尺五寸（後漢の一尺は、二三・七五センチ）、両の耳は肩まで垂れ、手を伸ばせば膝下にどき、目はよく己の耳を見、顔は冠の白玉の如く、唇は紅をさしたよう。中山の靖王劉勝の末孫、漢の景帝陛下の玄孫、姓は劉、名は備、字玄德である。そのかみ漢の武帝の御代、劉勝の子劉貞、涿鹿亭侯に封せられ、のち皇室に規定の祭祀料を差し出すことを怠って官を召し上げられたことがあり、その血筋の涿県に遣ったものである。玄徳の祖父は劉雄、父は劉弘という。劉弘はかつて孝廉に推挙されて官に仕えたが、若くして死んだ。玄徳は幼くして父親に死に別れ母親に孝養をつくした。家は貧しく、草鞋を売り席を織って身過ぎとしていた。涿県の棲桑村に住んでいたが、家の東南に桑の太木があつて、高さ五丈あまり、遙かに望めば亭々として馬車の傘のようであつた。ある相術師が言ったことがある。

「この家からは、きつと貴人が出られましようぞ」

玄徳は幼時、村の子供たちとその木の下で遊んでいて、

「おれは天子になって、この車に乗ってみせるぞ」

と言ったことがあつたが、叔父劉元起は、その言葉を奇として、

「うむ、この小僧、なかなか見どころがあるわい」

と、それ以来、玄徳の家が貧しかったので金をあたえ長く面倒をみてやつた。

十五歳のとき、玄徳は母親より遊学に出され、鄭玄・盧植に師事し、公孫瓚らと交わりを結んだ。劉焉が募兵の高札を出したとき、玄徳は

すでに二十八歳であつた。

その日、彼は高札を読んでわれ知らず深い吐息を洩らした。と、うしろで、

「男一匹、国のために働こうともしないで、溜息をつくとは何事だ」と大音におめく者がある。

振りかえつて見れば、身の丈八尺、豹の如き頭につぶらな目、肉つきあくまで豊かな頬から頰に虎の如き鬚をたくわえ、その声万雷のほためぐが如く、その勢い奔馬の如き男である。その異様な風采を見て名を問うと、

「おれは姓は張、名は飛、字翼徳。代々この涿郡の住人で、田地をいくら持ち酒や豚肉をあきなつてはいるが、つねつね天下の豪傑と付き合っているもんだ。ちょうど、いま、おぬしがこれを見て溜息をついたので、声をかけたんだ」

「それがし、もとは漢皇室の流れを引く、姓は劉、名は備と申すもの。近頃、黄巾賊の猖獗を耳にし、賊を平らげ民を救おうとの心ありながら、如何せん力たらず、それ故思はず溜息を洩らしたのでござる」

「そうとあれば、おれのところにいささか金の用意がある。さっそくあたりの若い者を募つて、おぬしとおれとで一旗挙げようじゃないかどうだ」

玄徳は大いに喜び、村の酒屋に誘つて酒をくみかわした。そこへ、一人の偉丈夫が一台の車を押して来て店の前にとめ、中にはいつて腰をおろすなり店の者を呼んだ。

「おい、酒を急いでもってきてくれ。これからお城の軍勢にはいりに行くのだからな」

玄徳がその人を見れば、身の丈九尺、髯の長さ二尺、顔色はくすべた稗の如く、唇は朱をぬったよう、切れ長の目、太く濃い眉。人品衆